

海を越えて続く鉄路 — 現代に生きる渋沢敬三のフィールドワーク観 —

飯田 卓 (国立民族学博物館)

フィールドワークは民俗学と民族学・文化人類学にとって重要な方法論であり、見かたによっては概念や理論より重要とすらいえる。日本ではすでに江戸期、博物学の流行とともに、その重要性が多くの研究者に認知されていた。近代的な制度のもとでは、1884年に発足した「じんるいがくのとも」(後の東京人類学会、日本人類学会)の活動をとおしてフィールドワークが定着するが、その広範な普及は1920年代から1930年代にかけてとみるほうがよい。この時期、民俗学と民族学のほかに考古学でも分野の著しい制度化がみられ、日本人類学会の活動は、形質人類学の分野にむけて大きく舵を切っていく。

渋沢敬三が大学を卒業してアチックミュージアムの会合を本格化させた1920年代、フィールドワークはある意味で学問の基礎になっていたが、それでも、その位置づけは研究者によって異なっていた。ひと言で言えば、研究資料のコンテキスト(文脈)を重視すればフィールドワークは長期滞在型に、スケラビリティ(拡張性、チン 2020)を重視すれば広域移動型になる。渋沢は、採集された民俗なり民具なり俚諺なりの情報を、採集地の文脈に即して解釈することに重きを置いており、明らかにコンテキストを重視していた。したがって、特定のテーマを追いかけて全国を周遊すること以上に、時間をかけてひとつの土地に滞在し、ひとつの情報を全体性のもとに把握することを心がけた(全 2021)。

上述のことは、渋沢が日本各地さらには海外を広く旅行し、見聞を広めたことと矛盾するようにみえる。しかし渋沢は、民俗学者・民族学者であるとともに、銀行家でもあった。銀行業のために独力で長期調査をおこなえず、その成果をモノグラフにまとめたりする時間的余裕もない渋沢は、早川孝太郎のような有志を支援することで学問の発展に寄与した。また、鹿児島ー奄美大島間に定期航路が就航したときに視察旅行を学術調査に仕立てあげたごとく、さまざまな分野の研究者と協働することで、短期の旅行でも質の高い資料(有機的に結びついて文脈化された情報)を多く集めるよう心がけた(加藤 2020)。

日本民族学会のために博物館や研究所を設立し、さらに館員・所員の報酬まで寄付するという慈善的な学術支援は、いうまでもなく、祖父 渋沢栄一から薫陶を受けた実業家でなければなしえない。しかしここであらためて検証したいのは、鉄路や航路など交通網の拡張という時代背景である。早川孝太郎が調査した奥三河設楽、村上清文を遣わした越後三面、磯貝勇らの拠点だった広島、永井龍一が教鞭をとった鹿児島など、渋沢はじつに多くの土地を訪れた。渋沢は広域移動型調査のためにこれらの土地に赴いたのでなく、長期滞在型の調査者を励ますためにこそ、広く旅行をおこなった。そしてそれを支えたのが、鉄路と航路の発展だった。渋沢の足取りが台湾や朝鮮半島にまで向いていたことを考えれば、彼の理想は、戦後に文化人類学の分野で花開く長期滞在型の海外調査にあったといえるのではなかろうか。

ただし、戦後に発展するのは、交通手段の拡張に乗じたフィールドワークだけではない。とりわけインターネットの拡張と高速化により、研究者どうしの交流によって学術が進展した側面も無視できない。郷土会や木曜会を主宰し、『郷土研究』や炉辺叢書を監修した柳田國男のプロジェクトもまた、戦後に大きく飛躍を遂げたといえる。いや、飛躍のプロセスはまだまだ途上にある。

- 【参照文献】 加藤幸治 2020 『渋沢敬三とアチック・ミュージアム』 勉誠出版。
全京秀 2021 「渋沢敬三の「全体」と「自民俗誌」」『歴史と民俗』37: 15-90。
チン、アナ 2019 『マツタケ——不確定な時代を生きる術』 赤嶺淳訳、みすず書房。